



Title	永田仁助先生を憶ふ
Author(s)	今西, 茂喜
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 98-100
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/88768">https://hdl.handle.net/11094/88768</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 永田仁助先生を憶ふ

懷徳堂理事長永田仁助先生、昭和二年三月東京の旅寓に病む、學長松山先生馳せて訪ふ、越て十日病草まり終に逝く、全十一日靈柩を大阪驛頭に奉迎す、朝野各階級の名士會するもの三千許名、越へて十三日葬儀を四天王寺に執行せらる、此日會葬者全国各地を通じて而も雨中馳せ至るもの八千許名と註せらる、嗚呼盛哉、先生は實に余の先師南岳翁の高弟泊園門中出色の成功者の第一人として世間夙に定評あり、抑懷徳堂再興の舉あるや、先生は天囚博士と名を齊ふして創業者の一人として計畫施設具さに至らざるなく、爾來、幾星霜を経て上下の信望愈隆く、早くも再び宮内省の御下賜金を拜し、尙久邇宮兩殿下の台臨を賜ひ、更に岡田

## 今 西 茂 喜

文部大臣の臨場を辱ふす、是蓋し先生が特に叙位の光榮に浴し、且上院の議席を占め、上は皇室の御信任を荷ひ、下は民衆瞻仰の徳によるの效與かつて力あるに由る也、先生初め泊園を出て實業界に投するや、既に衆望の歸する所となる、而も恒に先師の教訓を服膺し、敢て或は懈らず、愈久ふして愈其信條を遵守し、四十年一日の如く其能く師家に仕事するの誠懇と、懷徳堂に對する不休の努力とは、遂に至大の信用を博し、以て先生今日大成功の基礎を牢固ならしむ、其上更に五萬金を私捐し將さに大に盡す所あらんとして而して終に起たず、斯道の爲め轉た痛惜に堪へざるものあり、就中余の特に敬服を禁

せざるは師の先考を顯彰するに當り、遺憾なく其學系を祖述宣揚せられ、以て師家の美を濟さしめたるの一事にあり、是れ主として先生の斯道に造詣深く、人格志尙の崇高善美なるに之れ因る、乃、大正四年十一月朝廷東賅先生の儒勳を録せられ、御贈位の御沙汰を拜するや、先生率先して同先生の傳記を叙し、其學統を紹述し、吾國體の尊嚴對孔子道の交渉を論するや、學理精透、義理鮮明他同門弟子の追隨を許さざるの所不覺（泊園門中其人任矣）の歎あらしむ、今其要項を摘記すれば如左、

原聖志一節、抑本邦之風則神氣所結、非假人制、而皇統一系、有與夫子之志符者、則奎運日昌、鴻儒輩出、殆勝唐宋、而上之、亦必非偶然也、故誦夫子之書者、不可不知本邦之尊矣、知本邦之尊者、豈可不講夫子之道乎、

思問錄一節、當是時周王在上、九鼎不動、若使惠宜用此言乎、使孟子遂其志乎、將如周王何、蓋夫子之於君臣最儼矣、八佾雍徹、不惜餘論、拜上拜下、不厭達衆、周之至德、稱其服事、

而不及征伐、著其春秋也、揭春王以立之極、今勸王之事、與此背馳矣、孟子嘗曰、乃所願則學孔子、其所學何遺君臣之義也、孟子又曰、聖人人倫之至也、勸王之事非亂倫之魁乎、又曰、揚子爲我、無君也、勸王之事無君莫甚焉、又曰孔子成春秋而亂臣賊子懼勸王之事、乃爲亂賊之歸、此不唯與夫子背馳、於其所自言亦相犯矣、

以上前説は四海一君、萬世一系の理想は、我國體の尊儼に於て獨り之を専らにすべきものにして孔夫子の志此点に存する以上は。聖人の道たる今也彼土に絶滅して専ら吾國に儼存する所以の意を切言し、後説は辯士孟子の齊宣、梁惠、に天下に王たらんことを勸めし一事は、當時若し之を實行せられたりとせん乎、抑周王を如何せんとする乎、是實に天下の大倫を亂るもの也と指摘論難せられたるもの也、蓋東賅先生當時に在ては、儒流中徒らに大陸の文化に眩惑せられ、大義名分を遺れたるの輩亦鮮しとせず、此時に當り卓然君臣の大倫を體認し、孔夫子の眞

誦を諒解せられたる一大獅吼は、宛然百獸の潛伏の概なくんばならず、而して能く此泊園一家言を玩味咀嚼し得て以て此一大抱負を宣傳せられたるは、職として先生の學殖の博大雄渾能く眞聖人の大本領を體得したるに之由る、之を以て一家を修齊し、郷黨を指道し、施て浪華文教の振肅興隆に貢獻せられたるの偉勳は、優に之を二百年前懷德堂の創設に伴ひたる文才類出徳川氏中世に於ける文

## 文學博士松山直藏先生追悼記

懷德堂學長文學博士松山直藏先生本年四月廿三日逝去せらる、嗚呼悲夫、去三月永田先生を喪ひ、次で先生に及ぶ、旻天何ぞ懷德堂に幸せざるの太甚しき乎、茲に蕪文を草して其遺風を偲び聊か追慕の誠を敷かん。

化進展の偉觀と比肩せしむるに足る、尙且、堂友會に在ても將さに此一大偉人の啓發指道に仰ぐ所あらんとして此悲に遭ふ、於是乎（浪華實業界中儒道之將星殒矣）の歎無くんばあらざる也、況乎松山先生又次で病歿の不幸を見るに於てをや、嗚呼豈獨り浪華のみならん、亦實に帝國儒道の爲めに惜みても尙惜まざるを得ざる也。

今 西 茂 喜

英國碩學 John Stuart Mill は言論自由を高唱するの前提として、世の所謂異端邪説の出現を以て、眞理發見の初一步とせり、是蓋し他山の石以て玉を攻くの理に於て切磋琢磨の効能く眞理の彼岸に達すべき道程と認めたるを